

緑 3年後ゲート事業を3倍増

応 3製品を新シリーズ化

総合ゲートメーカーの応緑(兵庫県姫路市、河越祥郎社長)は、ゲート関連のオンリーワン商品(3製品)を新シリーズ化、ゲート事業のさらなる拡大を図る。3年後をめどに、同事業の売上高を現状の年間2億円(内メンテナンス3千万円)から3倍強の年間6億5千万円(同5千万円)に引き上げる。大型・超大型ゲージの設計・製作・施工までを一貫で高品質に供給できる体制を活用し、操作性・耐久性・デザイン性に優れ、自動・安全・セキュリティ機能などを組み込んだ3製品の普及を進めることで目標達成を目指す。

今回、3つのオンリーワン商品をシリーズ化することで、さらなる製品の受注増を目指すもの。「エアポートゲート(写真)」は航空機が通れる大型電動門扉で、通行時の重量に耐えられる高品質レールを採用している。作業車など通過車両が多いことから、耐久性にも優れている。バックアップシステムにより、メーターが起動できる。停電などにより動力が損失した場合でも、手動による開閉操作が可能。今後、空港の老朽化対策向けで受注を拡大していく。「セパレートゲート」は連結・分離を可能にした門扉。特徴は新連結装置「ゲートコネクタ」の開発により、ゲート間口の簡易可変化を実現した。電動ゲートにも対応し、可変後の間口にも自動対応できるうえ、遠隔操作による開閉も可能。今後、大型工場・大型物流倉庫、大型研究施設向けなどで受注を強化していく。「スロープゲート」は勾配地に対応できる門扉。特徴はスロープブレイクシステムの開発により、勾配地への手動ゲートの設置が可能。設置されるエリア景観に応じて、周辺意匠に合わせてデザイン仕上げができる。電動化により、遠隔操作による開閉・監視もできる。勾配地の店舗や施設向けなどで新規受注を目指していく。



応緑 オール木製ゲートを開発へ

応緑は横引き方式のオール木製の脱炭素ゲート(仮称)「ウッドイーゲート」を開発し、2023年度中にも本格的に受注を開始する予定。オール木製の門扉を製造することで、SDGsに対応し、脱炭素社会の実現に貢献していく。

現在、小型ゲートは加工しやすいアルミ製が多い。

しかし、原材料の電気分解で大量の電気が必要だった。一方、大型ゲートは鉄製が主力だが、スチールの生産時に大量の二酸化炭素が発生する。同社は鉄製のゲートを主力にしているが、SDGsに対応し「オール木製脱炭素ゲート」も開発し、商品メニューに加えた。同製品の特徴は門扉本体を米松、ひのき、集成材などの木材で製作。ガラスコーティング技術で木材内部までコーティングすることで、防腐・防火・耐久性向上に対応している。手動・電動選択が可能で、電動の場合、再生可能エネルギーの使用ができる。